

IIAS「ゲーテの会」ブックレット  
(VOL. 01008)

近代科学をいかにして超えるか  
— 自然と人間との関係性を考える —

(思想・文学分野)

**合理的な神秘主義**  
— 命を破壊する暴力についての厳密な学の構想 —

公益財団法人国際高等研究所  
<「新たな文明」の萌芽、探求を！>プロジェクト

本ブックレットは、2014年3月17日開催の第8回『満月の夜開くけいはんな哲学カフェ「ゲーテの会」』の講演録を基に、公益財団法人国際高等研究所<「新たな文明」の萌芽、探求を！>プロジェクト事務局が編集・制作したものである。

※本ブックレットの無断転載・複写を禁じます。ただし、個人としてのご利用の範囲内であれば、コピーしてご利用いただけます。

## 近代科学をいかにして超えるか

－ 自然と人間との関係性を考える －

# 合理的な神秘主義

## － 命を破壊する暴力についての厳密な学の構想 －

20世紀は「計算」が「論理」にとってかわる時代であった。そのなかで理性の限界は、ますます顕となった。原発事故もまたその一例に過ぎない。「もちろん語りえぬものはある。それは自ら表れる。それが神秘である」「語りえぬものについて人は、沈黙せねばならない」というヴィットゲンシュタイン(Wittgenstein)の言葉を真剣に受け止めるなら、神秘を明らかにしようとする冒涇を放棄し、神秘的な生きる力を破壊するものを、厳密に解明し、それを除去する方法を明らかにすべきである。このような学問のあり方は、仏教・儒教・道教などの東アジアの伝統に合致する。キリスト教を背景とする近代科学とは異なった宗教的基盤の上に、新しい厳密な学を再構築することが、人類の知識をより客観化し、現代の危機を切り開く智慧を生み出す道であると考えている。これらの考えについてご紹介し、かつ皆様と議論したい。

### 安富 歩 (YASUTOMI Ayumi)

1963年生まれ。1997年、京都大学にて博士（経済学）を取得。2009年より東京大学東洋文化研究所教授。

著書に、『合理的な神秘主義－生きるための思想史』（青灯社）、共著『親鸞ルネサンス 他力による自立』『原発危機と「東大話法』』（明石書店）、『生きるための論語』（ちくま新書）、『経済学の船出』（NTT出版）、共編著『「満洲」の成立』（名古屋大学出版会）、『貨幣の複雑性』『「満洲国」の金融』（創文社）などがある。



## 目次

はじめに ～ オープニングの歌を聴いて

- ① 『魔王』に込められたゲーテの思い
- ② 異質なものの出会いから独創性が生まれる

### I 「語りうるもの」と「語りえぬもの」

- (1) 人はなぜ暴走するのか
- (2) 生命や社会の複雑さは解明されない
- (3) 語りえぬものは、沈黙

### II 「神秘的な合理主義」と「合理的な神秘主義」

- (1) 「語りえぬもの」を認めない「神秘的な合理主義」
- (2) 人間社会を変えた「ラッセルのパラドックス」
  - ① ラッセルと「ラッセルのパラドックス」
  - ② コンピュータの基礎モデルの誕生
  - ③ 人間社会が根本から変わる
  - ④ 世界は「神秘」に支えられている

### III 客観的な学問への到達

- (1) 人類史において果たすべき日本の役割
- (2) キリスト教における「選択」「計画」と「存在」の概念
- (3) 異なる宗教的伝統の上に再構築する新たな学の可能性

2014年3月17日開催

第8回 満月の夜開くけいはんな哲学カフェ「ゲーテの会」

テーマ：合理的な神秘主義 — 命を破壊する暴力についての厳密な学の見識 —

講演者：安富 歩（東京大学東洋文化研究所教授）

(文中敬称略)

はじめに ～ オープニングの歌を聴いて

① 『魔王』に込められたゲーテの思い

最初に、先ほどの演奏を聴いて気づいたことがあったので、その話をさせていただきたい。

「ゲーテの会」にふさわしく、ゲーテの詩をいくつか歌っていただいたが、シューベルトの『魔王』の表現していることが何であるのか、について初めて思い当たった。この曲は中学生時代の音楽の時間に習ったと思うが、じつは現代の文明に対する批判の歌である。つまり、子は人類、父は科学や学問であり、魔王はまさに人類の運命を表現していると思う。

例えば、出だしの「坊や、どうしてそんなに怯えているんだい」「お父さん、見えないの？そこに恐ろしい魔王がいるよ」「大丈夫、木がたなびいているのがそう見えるだけだよ」という対話などは、3年前の原発事故の後、テレビで度々聞いたような気がする。そして「可愛い坊や、一緒にすてきな遊びをしよう。色とりどりの花が咲いているところ、金色の服を持っている私の母のところだ」と続くが、これは原子力発電を推進する人々が我々に向かって語り掛けた言葉そのものだったのではないか。結局、我々が恐れるもの、怖いと感じるものに対して「そんなものは怖くない。それはただのまやかした。見せかけで怯えているだけだ」と説得する人々がいて、その結果、最後には大変な悲劇が待っているという、そういうゲーテの現代の文明に対する直感が表現されていたと思う。

また、そういう作品がシューベルトによって作られたということも興味深い。シューベルトはベートーヴェンの影響を強く受けているが、ベートーヴェンが交響曲第五番『運命』で表現しようとしたのも同じようなことだったと思う。第1楽章の主題は有名だが、第2主題は猫なで声のようで、それはまさに『魔王』の最後の「無理にでも連れていくぞ」という声と、その前の「金の服を着よう」という猫なで声の組み合わせと同じである。そこから、シューベルトが、ベートーヴェンの影響を直接受けていることが分かる。

さらに、ゲーテは警告だけではなく、どうすればよいかということを示すことで詩として表現している。2曲目の『Freisinn(自由な心)』の詞は「ぼくをいつでも鞍の上にいさせておくれ。お前たちは小屋やテントの中にとどまるがいい。ぼくは遙か彼方にと喜んで出かけよう。光り輝く星だけが帽子の上に広がっている。神様は大地や海への道標として星座をお創りになったのだ。空を見上げさえすればお前たちの喜びとなる」と訳されている。これは「我々を導くものがある」ということを示している。つまり、神秘的なもの、神が創ってくれた星座のようなものが我々を導いてくれるのであって、それは『魔王』の父のような理

知的な導きではなく、それとは別の次元での神秘的な理性、知性が導くことを表現していると思う。

## ② 異質なものの出会いから独創性が生まれる

ハイネの詩も興味深かった。3番目に歌われた『きみの顔』は「可愛らしい唇はやがて消えてしまうだろう」という恐ろしい詩だが、この詩も、やはり人間が生まれ持ってきたもの、子どもが持つ知性、創造性がやがて教育や躰、あるいは社会の順応の中で失われてしまうことを表現しており、そういうものを作り出す歪んだ知性に対する痛烈な批判だと思われる。本日の歌をどのような基準で選ばれたのかは分からないが、こういう詩を歌っていただいたのは、非常にふさわしい選曲だったと思う。

最後は私のリクエストした松村禎三の曲である。彼は旧制第三高等学校の理系を卒業した後、芸術家を目指して芸大に入学しようとしたが、病気で入ることができなかった。しかし、偉大な作曲家になり、後に芸大の作曲科の教授になっている。松村禎三の作品の特徴は、日本の文化をはじめとしたアジアのいろいろなエレメントを取り込みながら、それをピアノやオーケストラというヨーロッパ的な作品の中に昇華させることに成功したという点である。そういうことを試みた人は多いが、成功した人は数少ない。そういう作曲家である。

彼の作品には素晴らしいものが数多くあるが、この作品はとて可可愛らしい、美しい曲なので聴きたいと思っていた。『魔王』のような恐ろしい曲を聴いた後では本当に素晴らしかったし、それは我々が目指すべき方向も指示していると思う。

例えば、日本で一番成功した作曲家は伊福部昭である。その名前を聞いたことがない方もおられるかもしれないが、彼の作品を聴いたことのない人はほとんどいないだろう。なぜなら伊福部は『ゴジラ』や『大魔神』の主題曲など、映画の主題曲を数多く作った人で、『ゴジラ』の曲ほど全世界に広まった日本の作曲家の作品はないと思う。

その伊福部昭は北大の農学部出身で、森林官として今の国土交通省のようなところに勤め、樺太の森林で仕事をする中で、アイヌやオホーツク海の音楽に目覚め、そういうものをたくさん集めている。そして、後に完全に独学で作曲家になった。おもしろい逸話があって、彼はコーブランドの作った曲が大変気に入ったのでコーブランドに手紙を書いたところ、「こんな厄介な曲を理解できる者はきっと作曲しているに違いないから、お前の書いた作品を送れ」と言われた。そこで、作品を送ったら世界的に有名になったという人である。戦後、しばらく芸大でも教えていた。松村禎三も、大学で教えは受けていないが、伊福部の門下生である。

独創性とは、常にそのようなものだと思っている。個人の中に突然、独創性が湧くのではなく、相互に異なるものが会合するところに独創性が生まれる。それが特に音楽には明確に表

れていて、その端的な例がロシア音楽である。ロシア音楽は近代化の中でヨーロッパの音楽と出会ったことから、ムソルグスキーやリムスキー・コルサコフ、そしてチャイコフスキー、リムスキー・コルサコフの弟子のストラヴィンスキー等の素晴らしい音楽家が生まれ、次々に素晴らしい作品を生み出し、19世紀の後半から20世紀の音楽を形作っていった。

そのような出会いが何らかの形で昇華されたときに、素晴らしい作品が生まれるのだと思う。学問もそうだと思う。

本日は、現代の学問の限界がどこにあって、それを乗り越えるべき方向がどこにあるかについて、私がこれまでに考えてきたことを、私の著書である『合理的な神秘主義』の中の一冊肝になるところと合わせて紹介していきたい。

## Ⅰ 「語りうるもの」と「語りえぬもの」

### (1) 人はなぜ暴走するのか

私は元々経済学の出身で、住友銀行に勤め、オムロンのATMの管理等を行っていたが、会社を辞めて大学院に戻った。その背景には、銀行における耐え難い違和感があった。住友銀行は大変な会社で、バブル経済の中で懸命にバブルを起こす仕事をしてきた。その中で私は、優秀な人が集まっているしっかりとした会社が段々とおかしな方向に走っていくのを目の当たりにした。当時はそれを意識できなかったが、段々と皆がおかしくなっていき、自分自身も発狂していくような感覚があって、それに耐え切れなくなったので、会社を辞め、大学に戻ったのである。そして、「皆が暴走するとは、どういうことなのか」ということを研究し始めた。

最初に研究したのが、「満洲国」という日本が作り出した国の金融を通じた歴史である。それは日本社会が戦争へと暴走していくプロセスを理解したかったからだが、じつは、経済学というのは基本的に「暴走」を扱わない。それについてはマルクスが重要な論を提示しているが、それを除くと「均衡」という概念が支配していて「暴走」は出てこないのである。

それで、どうすれば「暴走」を研究できるかと考え、いろいろなものを読んでいる中で、プリゴジンという化学者の統計力学、熱力学の本に衝撃を受けた。

また、京都大学の蔵本先生が非線形科学を研究されていると知り、蔵本先生の統計力学の講義に出て1年間勉強させていただいた。そして、蔵本先生の研究室に出入りし、非線形科学を学んだ。コンピュータのシミュレーションで貨幣を生成したり、崩壊したりする様子や、レプリケータ方程式によって、生物が大量に存在し、かつ絶滅が定義されている場合、どのような振る舞いをするかというモデルを研究した。

そういう研究をしているなかで私が気づいたのは、暴走し始めた人間は対流する水分子とさほど変わらないということである。当初は、「人間が暴走する」というのは、水の分子

が相互作用して動き出すこととは全く違う複雑さを持っていると思っていたが、一旦暴走し始めると水と変わらないほどシンプルなシステムになってしまうのではないかと考えるようになった。

## (2) 生命や社会の複雑さは解明されない

ところが、「では、どうすればよいか」と考えるところで私は行き詰まった。当時、我々が研究していた複雑系科学の分野では、人間や生命や社会という複雑さを明らかにすると標榜していたが、10年ほど研究しても少しも明らかにならないと感じた。分かったことは、人間社会という複雑なものを理解することはできないが、人間社会が暴走すると急に複雑さの次元が落ちて、非常にシンプルなシステムになってしまい、そこから先ならば理解できるのではないかということである。

私も、研究資金の申請書には、複雑系科学の手法で「生命や社会の複雑さを明らかにする」と書いて助成金をもらったりしたのが、実際には、そういうことはできないのではないかと、考えるようになった。

## (3) 語りえぬものは、沈黙

そこで、私は複雑系科学から離れ、「では、何を考えたらよいのか」と考え始めた。それが2000年前後のことであり、10年ほど考えて、当たり前のことに決着する。それは考えられることと、考えられないことがあるということである。しかも、いろいろと調べているうちに、よく考えてみると、前々からそれを知っていたことに気づいた。

それは、ヴィットゲンシュタインという哲学者が必死に言っていたことであり、有名な『論理哲学論考』で彼は「語りうるものについては十全に語りうる」と言い、「語りえぬものについて人は、沈黙せねばならない」という命題で終わっている。さらに、もう少し前には「もちろん語りえぬものはある。それは自ら表れる。それが神秘である」と表現している。

ヴィットゲンシュタインという哲学者は、登場したときは全くの無名であったが、急速に有名になり、現代では史上最も偉大な哲学者と位置づけられている。しかし、そう持ち上げる割に、ヴィットゲンシュタインが神秘について言っていることを、哲学者もあまり真剣に聴いていないような気がする。そこで、「語りえぬものについて人は、沈黙せねばならない」という言葉を、真面目に受け取らなければならないのではないかと考えるようになった。しかも「神秘」はあると言われているのである。



ルートヴィヒ・ウィットゲンシュタイン (1889 - 1951) Moritz Nähr, Public domain, via Wikimedia Commons

今話を私の問題に引き付けて言うと、「経済のシステムがきちんと運営されているのはなぜか」という問いに対して、経済学では、例えば「需要と供給が一致するところで価格が決ま



る」とか「それぞれのエージェントは効用を最適化しようとしていて、その各自の最適化の統合された結果が均衡化になり、それが、世のなかがきちんと動いていることを示している」と説明する。しかし、私がヴィットゲンシュタインの言葉を真面目に受け取るなら、「経済がきちんと動いているのはなぜか」という問いは「神秘」に属しているのではないかと思う。経済がきちんと動いているという現象はあまりにも複雑で、もはや神秘的であり、我々が理解できないということを認めなければならない。

では、その代わりに何を考えたらよいかというと、語りうるものについて語らなければならない。語りうるものとは、神秘的な作動を破壊するものではないかと思う。例えば「きちんとした経済の動きは、どうすれば可能か」という問題をいくら議論しても答えは出ないが、「どうしたらバブルが起きるのか」「バブルが起きたらどうなるのか」「どうすれば会社は潰れるのか」などは説明できる。それに対して、経営学は「こうすれば上手くいく」という研究はするが、「なぜ会社は潰れたか」という研究はあまりしない。恐らく「こうすれば会社は潰れる」という本を書いても経営者は読んでくれないと思う。しかし、『失敗の研究』という本がロングセラーになっているので、やはり大事なことなのだろうと思う。

簡単な例を挙げると、「人間はなぜ生きているのか」を問うのは難しいが、誰かが死んだときに「なぜこの人は死んだのか」という理由は簡単に調べられる。例えば「心臓にナイフが刺さって、それが血管に達して血が大量に流れて死んだ」というように、原因を明らかにすることができる。しかし、生命や社会や宇宙、その神秘そのものを問おうとするのは、ある種の冒瀆であることを認めざるを得ない。

それを認めると科学の敗北につながると思う人もいるかもしれないが、私は、それは迷信に過ぎないと思っている。そうではなくて、神秘的なものを認めた上で、その神秘的なものを破壊するものについて合理的に、厳密に考えれば良いのではないか。それが私の言う「合理的な神秘主義」である。つまり、神秘的なるものによって宇宙が支えられている、人間が支えられていることは認めるが、合理的思考は手放さない。合理的思考は、その神秘を破壊するものについて適用し、それを解除するために使う。それが私の主張する「合理的な神秘主義」である。

## II 「神秘的な合理主義」と「合理的な神秘主義」

### (1) 「語りえぬもの」を認めない「神秘的な合理主義」

私は蔵本先生のような偉大な科学者に、何人か身近に接したことがあるが、彼らは謙虚である。蔵本先生は「私は自然現象をすべて理解した」というようなことは決して言われない。そうではなくて、「人間の理解できる範囲は限られており、厳密な記述ができる範囲は特異な現象の起きる場所にのみ限定されていて、そこにおいてのみ一般性が見られる」というのが、蔵本先生の複雑な自然学に対する提唱である。これはつまり、理解できる範囲が限定さ

れていることを前提に議論されている。もしかすると、私が考えているように、ヴィットゲンシュタインの言う「語りうるもの」と「語りえぬもの」をきちんと区別せよと指摘されているのではないか。これは 20 年前には分からなかったが、最近、蔵本先生の本を読むと、そういうことではないかと思うようになった。

その謙虚さを多くの科学者は見失う。そして、自分が習ったこと、自分の知っていることが、自分の対象とする分野のすべてを理解するための鍵になると妄想するようになる。そういう人たちは、他の人から「そんなことはできないのではないか」と言われるとたちまち激怒して、相手を口汚く罵り「この素人め」と蹴り出してしまう。こういう行動は「神秘的な合理主義」であり、合理的な思考さえあれば、何でも理解できるという神秘主義に走っていると思う。その「神秘的な合理主義」こそが、まさにゲーテが批判したものではないだろうか。

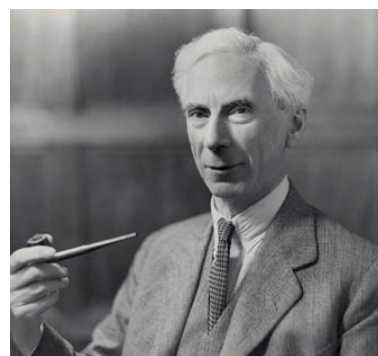
ゲーテは「神秘的な合理主義」ではなく、「合理的な神秘主義」を唱えていたのではない。ゲーテは非常に合理的な人で、その思考は厳密で合理的な積み重ねのなかに生み出されていると思う。そして彼は、神秘的なものを冒瀆しようとする者を『魔王』という恐ろしい詩で表現している。ある意味、ゲーテは「合理的な神秘主義」の重要な先駆者ではないか。私はそう思っている。

## (2) 人間社会を変えた「ラッセルのパラドックス」

### ① ラッセルと「ラッセルのパラドックス」

こういうものを考える上で非常に重要な学者が、バートランド・ラッセルである。彼は生きている間は大変な有名人で世界中から尊敬されていたが、亡くなると急に誰も彼の論を読まなくなり、今は合理主義のどうしようもない人のように思われているふしがある。しかし、それはとんでもない話である。なぜそうなったのかという理由は明らかで、彼は本を書き過ぎたのである。何百冊もの本を書き、しかもその間に非常に難しい論文を山のように書いたためにラッセルの本をすべて読むことは不可能に近くなった。しかもその長い人生の間に、多くの問題について意見を何度も変えた。

ラッセルは非常に厄介な人で、A を主張する時点で自分が主張しようとするについて徹底的に批判的に考察した結果、「A は無理だ」という結論を出すと、次は B を主張するが、B について徹底的に考えた結果、「B は無理だ」という結論を出す。そのような形で次々に進んでいく。そのため、ある時期のラッセルの本を読んで「ラッセルはこんなことを言っているが、ここは間違っている」というようなことを書くと、同じことを必ずラッセルがどこかに書いているので、「お前はラッセルを読んでいないだけだろう」と言われる。そういう仕組みになっているので、ラッセルについて言及するために



バートランド・ラッセル (1872–1970)  
Bassano Ltd, Public domain,  
via Wikimedia Commons

は、一生かけて読んでも間に合わないくらい勉強しなければならない。そのため、皆、面倒になって「ラッセルはもう読まなくてよい」と言わざるを得なくなったのではないかと思う。

これと対照的なのがヴィットゲンシュタインで、彼は生きていた間に本を 1 冊しか出版していない。2 冊目が亡くなった直後に出され、山のように草稿が残っているが、少しずつ出版されるので、ヴィットゲンシュタインについては、取り敢えず『論理哲学論考』だけ読んでいけば意見を述べてもよいということになっている。それで皆が飛びついて、ヴィットゲンシュタイン研究者になっている。そう考えると、有名な学者になるコツは、あまりたくさんの著書を出さないことではないかと思う。

では、そのバートランド・ラッセルは何を発見したのか。それが、20 世紀が始まる直前の 1900 年に発見された「ラッセルのパラドックス」である。彼は厳密さや合理性に対して異常に強い信念を持っている人で、「数学は曖昧で我慢ならないので、これを厳密にする」と、私には理解できないような大胆な動機から、論理学を厳密に記号的に構築し、その上に自然数や算術を乗せたら曖昧な数学がきちんとすると考えて、厳密な記号論理学を構築した。

ところが、そのなかで彼は恐ろしいことを発見した。「自分自身を要素として含まない集合」というものについて考えてみたのである。例えば、リンゴの集合を考えていただきたいが、リンゴの集合はリンゴではない。いかなるリンゴもリンゴの集合の要素だが、リンゴの集合は食べられないのでリンゴではない。したがって、リンゴの要素ではないので、リンゴの集合は「自分自身を要素として含まない集合」と言える。

ところが、厄介なのが、「自分自身を要素として含まない集合」の集合を考えた場合である。「自分自身を要素として含まない集合」の集合を  $R$  としよう。 $R$  は  $R$  の要素ではない、すなわち「 $R$  は自分自身の要素ではない」と前提すると、当然ながら、 $R$  は  $R$  の要素ではない。ということは、 $R$  は「自分自身を要素として含まない」という条件を満たしてしまう。つまり、 $R$  は  $R$  の要素になってしまう。これは矛盾である。「 $R$  は自分自身の要素ではない」という前提のゆえに、 $R$  が  $R$  の要素であるための条件を満たしてしまうからである。

では、逆はどうか。 $R$  は  $R$  の要素である、つまり「 $R$  は自分自身を要素として含む」と仮定すると、「 $R$  は「自分自身を要素として含まない集合」の集合である」という  $R$  の定義を満たさなくなる。

この矛盾に気づいたラッセルは、何か思い違いをしているのではないかと必死で考えたが、結果的に間違っていないことが分かった。つまり、いかなる厳密な論理を構築しても、この厄介なパラドックスが必ず取りついて矛盾が生じる。真か偽か決められない命題が必ず出現してしまう。そうなる、厳密な論理学を構築して、その上に数学を乗せるという野望が、一気に崩壊してしまうことが分かったのである。これが「ラッセルのパラドックス」である。

ところが、そこで挫けないのがラッセルの怖いところで、ラッセルはそういう変なことが

起きないようなシステムを考えようと思ひ立ち、厄介な手練手管を使って巨大な論理学を構築した。つまり、開くと様々な記号が電話帳のように並んでいて、それが3巻もあり、3,000ページあたりまでくるとようやく足し算が出てくる、という訳の分からない、とんでもない本を書いたのである。しかも、この巨大な本を瞬く間に書いて、その合間に山のようルポルタージュ等も書いているという、どうしてそのようなことができたのか理解できない大天才である。

そのようにして *Principia Mathematica* という本が出版されたが、完成はしたものの、ラッセルにとっては感動的な成果ではなかったはずである。元々は美しいシンプルな論理学の体系を作って、そこに数学を乗せて厳密にしようと思っていたのに、ラッセルのパラドックスを回避するための変な制約が付いた無様なものになってしまったので、彼はげんなりしたかもしれない。

しかし、一応は完成した。彼は厄介な問題を排除した。排除した体系の中でもまた厄介な問題が生じるかもしれない。そうしたら、またそれを排除する。するとまた厄介な問題が生じ、また排除する。このように無限に排除し続ければそれで何とかなると考えていた。

## ② コンピュータの基礎モデルの誕生

ところが、ラッセルが解決したと思った問題について、ゲーデルやチューリングが「解決していない問題が生じる」ことを示した。これについては説明する能力もないし、説明すると間違えると思うので説明しない。後から自分で調べていただきたいが、この問題をめぐる議論のなかで、アラン・チューリングという偉大な数学者が、「チューリング・マシン」というモデルを提案した。これは抽象的なもので、マシンがあり、テープがあつて、テープの上にマシンがどのように作動したらよいかという命令と、動作をする対象となる記述とを両方載せると、マシンは自分が何をすべきかの命令をテープから読みながら、テープに記載された対象を書き換えるという作業も行う。こういうシステムを考えると、いかなる機械の作動もシミュレートできることを数学的に証明したのが「チューリング・マシン」を使った議論である。

じつは、これが人類の社会を変えてしまう。つまり、このシステムがコンピュータの基礎モデルになっているのである。電子計算機は電子工学から生まれたのではないというのが重要なポイントであり、ラッセルがとてつもないことを考えて、数学を厳密にしようと思つて構築した記号論理学体系の欠陥から、コンピュータの基礎モデルとなる論理的システムが生まれたということである。

ラッセルの弟子であるノーバート・ウィーナーは、ラッセルのその野望を遠くから眺めていて「そんな無理なことをしたら、大変な矛盾が起こるだろう」と思っていた。それだけではなく、論文にも書いている。それが後にゲーデルやチューリングの仕事によって証明されたが、それについてノーバート・ウィーナーは「論理は思考の規範であることをやめ、論理展開の自然誌のようなものになった」と指摘している。つまり、完璧に厳密なシステムの上

にシステムが論理として記述され、その上に数学を乗せ、その数学によって自然科学を支えたら、完璧な論理システムに支えられた完璧な知識ができるというのは幻想だったということである。その代わりに出てきたのが、論理展開の自然誌である。論理展開の自然誌というのは、「人間が論理を展開するとは、このようにすることだ」という厳格な記述ができた、ということである。

つまり、ラッセルまでの人々は、完璧な論理の上に完璧な数学をつくり、完璧な自然科学をつくれれば、完璧な知識の体系ができて、それが我々を導いてくれると信じていた。ところが、「ラッセルのパラドックス」によって完璧な論理演算の規範は崩壊した。その代わり論理学は、「人間が論理を展開するときはこのようにしている」という記述となった。コンピュータは、この議論のなかから生まれた。コンピュータは、その論理展開の作動を、電氣的にシミュレートしているのである。つまり、完璧な論理学と完璧な知性が崩壊した瞬間に、コンピュータが出現して、自動的な計算システムを我々は手に入れた。ノーバート・ウィーナーはこのように理解していたと思う。

### ③ 人間社会が根本から変わる

現代は、まさにコンピュータによって人間社会が根本からつくり替えられている入り口に立っていると、ピーター・ドラッカーという経営学者は20~30年前に言っている。

人間社会は、人間でできているのではなく、コミュニケーションでできている。なぜかという、例えば、今我々はこの会場に集まっているが、もし一人ひとりが相互にコミュニケーションできない独房か何かに閉じ込められていたら、これを社会とは呼ばないからである。人間同士が相互作用するなかで、いろいろなコミュニケーションを展開して初めて社会はできる。したがって、社会の要素は人間ではなく、人間の取り結ぶコミュニケーションなのである。これはこの30~40年の間にコミュニケーション社会学と呼ばれる分野で明らかにされたことだと思うが、そのコミュニケーションのあり方が人間の社会の根本を規定する。人間同士がどのようにコミュニケーションするかによって、どのような社会ができるかが根本的に変わってくる。

最初、コンピュータは弾道計算機で、やがて、論理計算機などいろいろと言われたが、最終的に明らかになったのは、コミュニケーションの手段だったということである。コンピュータがコンピュータ同士を接続し、人間がコンピュータを介して相互に接続することで、コミュニケーションのあり方が根本的に変わり始めている。この根本的に変わり始めたコミュニケーション、つまり根本的に変わり始めた社会のなかで何が起きるかは全く分からない。

ピーター・ドラッカーが挙げている例としては、コンピュータで注文して物を買う場合、最初は注文したものをどのようにしてコンピュータの中から取り出したらよいかということ在必死に考えていた。しかし、あるときふと誰かが、コンピュータで注文したものを宅配便で届けたらよいことに気づいた。それによって流通が根本的に変わった。そのことを「コンピュータで流通革命が起きる」と言っていた人は誰も気づかなかった。それほど次に起こ

ることを考えるのは難しいので、ドラッカーは「次に起こることを考えることをやめよ」「今起きていることを見ろ」と助言している。

いずれにせよ、ラッセルのパラドックスによって、すべて我々の社会の根底が急激に変わり始めた。その変革の第一歩を踏み出したのが 20 世紀であり、変革が現実化するのが 21 世紀だと私は認識しているが、21 世紀という時代の学問を考えると、ラッセルのパラドックス以前の学問やその指針など、そういうものに従うのは大変な時代錯誤であると思う。

#### ④ 世界は「神秘」に支えられている

では、ラッセルのパラドックスの後に何を考えたらよいのか、その指針について必死に考えたのがヴィットゲンシュタインである。つまり、ラッセルは、システムを考えて矛盾が出たら、それについてメタ・システムを作り、そこでまた考えて矛盾が出たら、またそれについてメタメタ・システムを考えるというように、無限後退すればよいと考えた。それに対してヴィットゲンシュタインは、そこに神秘があることを認めよ、と主張したはずである。そうすると、ラッセルのパラドックスは消えて無くなる。『論理哲学論考』の中で、単に記述の仕方の問題で、2 回続けて繰り返すという操作ではなく、2 つの記号が付いている新しい記述だと理解しなければならないのに、それを繰り返すと思ってしまったところでラッセルのパラドックスが生じると説き、解決した。

そして、その解決の根本には「神秘」がある。論理は「神秘」によって支えられている。これがヴィットゲンシュタインの考えである。したがって、論理がどのようなものかを論理で書くことはできないので諦めよう、というのがヴィットゲンシュタインの呼びかけだった。その代わり、語りうるものについて語ろう。語りえぬものについては語ってはならない。これがラッセルのパラドックス以降の学問の指針であるはずだと、私は考えている。

我々の世界と我々の命が「神秘」によって支えられていることを受け入れるのは、ある種「神秘的な合理主義」という狂信が世界を覆う以前、当たり前のことだった。そういうことを受け入れない人間はほとんどいなかったと思う。したがって、何も新しいことを言おうとしているわけではない。

我々のように「世界は神秘によって支えられている」ということを受け入れた上で、それを破壊する、一般に暴力と呼ばれるものについて考えるような学問のあり方というのは、本来、医学がそうである。医学は人間が活着していることについては一切考えない。医学が対象とするのは病気や怪我だけである。つまり、神秘的な命の作動が歪められたり、断ち切られたりしているときに、どのようにしてもう一度つないだらよいかということ进行研究しているのである。

それが、どこかで狂って「医者が治す」という話になるが、例えば、ヒポクラテス主義では、「患者を治す」のではなく、「患者は治る」ということが大前提である。そして、医者にできることはその治癒を妨害しているものを取り除くなど、治癒の手助けをすることだけだというのがヒポクラテス主義である。近代の学問のモデルは医学だと言ってもよいかも

しれないが、じつは医学が、もともとそういう形をしていた「合理的な神秘主義」である。

したがって、人類の歴史から考えると、この概念はごく普通のことであり、目新しいことでも何でもない。むしろ、人類の長い歴史のなかで合理性が確認されていると思う。例えば、物理学という近代科学の模範となった学問も、なぜ力を対象とするのかということ、それが破壊力だからだと思われる。命やものを破壊する力について議論をしていると考えると、物理学がどうしてあれほどきちんとした学問であることができるかが分かると思う。

じつは、こういう観点に立って考えるなら、我々が取り組んでいる学問は、本当は「合理的な神秘主義」の上に成り立っている。それにも関わらず、それをとち狂って「神秘的な合理主義」で覆ってしまうと冒涇が生じる。つまり、「魔王」がやってくるのである。

### III 客観的な学問への到達

#### (1) 人類史において果たすべき日本の役割

しかしながら、そのように考えると、ヨーロッパの文化の圏内においては、そういうことを思い出すことが難しいと思われる。それは、近代の科学が人類のあり方を根本から変えて、とてつもない知識を我々に提供してくれたからであり、本当に大きな功績を上げた、そのただなかであって、それを疑うことは難しいと思う。したがって、ヨーロッパ的な文化圏の外にいる者がその限界を指摘し、そして、それと違うものを考える責務を負っていると思っている。

例えば、ヴィットゲンシュタインがそのようなことを考えるに至った理由は、彼が非常に深く東洋思想の影響を受けていたからである。例えば、量子力学などは仏教的な影響を受けていると思うが、そのように様々な形でじつは東アジアの文化が近代の学知に大きな影響を与えている。

日本という国は、伝統も保持しながら、かつ近代科学における知識の需要と生産を行っている社会なので、そういう人類史的な責務を果たす上で非常に良い場所にある。したがって、そういう地点に立つと思われる日本人あるいは日本社会というものが「神秘的な合理主義」に覆われた狂った活動を続けることは、日本にとって良くないだけではなく、人類史的な裏切りになってしまっているのではないかとさえ思う。

#### (2) キリスト教における「選択」「計画」と「存在」の概念

近代の学問は、じつは様々な意味でキリスト教及びその伝統の上に乗っている。つまり、キリスト教という枠組みから、それを否定して出てきたのだが、否定して出てくるときに元のものの刻印を大きく帯びている。例えば社会科学、特に私が取り組む経済学には「選択」という概念や「計画」という概念が大きな役割を果たしているが、「選択」や「計画」という概念は聖書の基礎概念である。

例えば「神の御計画」は福音書のキーワードであり、「神の御計画」を伝えるのが福音な

のである。あるいは、人間が最初に行った「選択」は、知恵の木の実を食べるという行為だったが、それによって善悪の判断がついてしまい、人間はエデンの園から追い出され、地上に降りる。そして、自らの意思で「選択」するようになるが、悪い「選択」をすると地獄に落ちる。そういう物語である。

このように、「選択」や「計画」という概念が経済学のなかで大きな顔をしているのは、キリスト教の聖書に書いてあるからなのである。

それはいろいろなところに見られる。例えば、「存在」という概念が哲学では非常に重要であり、「存在論こそ哲学である」と言われるが、そのような「存在論が哲学」という考えはギリシャにはあまりなかった。ギリシャにおいては「徳とは何か」「良く生きるとはどういうことか」ということが哲学の主テーマであって、「存在論」はその議論のために出てくる。ところが、近代の哲学においては「存在論」そのものが哲学とされて、「良く生きる」ということは倫理学で考える話になっている。

では、なぜ「存在」が出てくるかというと、聖書の中に、モーゼが神に「あなたの名前は何か」と尋ねたとき、「我は在りて在る者なり」と返事があったと書かれているからである。それがクライマックスのシーンだが、そこから「存在」が重要な概念になり、「神とは存在する者である」ということが中世キリスト教神学の最重要テーマになった。そして、「存在論」がクローズアップされた哲学が近代に生まれたわけである。

### (3) 異なる宗教的伝統の上に再構築する新たな学の可能性

現在、我々が大学で習ったり、教えたりする学問は、いろいろな意味でキリスト教の刻印を強く帯びている。それは非常に大きな成果を上げたが、それ自身が生み出している問題が、今我々が直面する問題であり、我々の直面する「魔王」となっている。

そうであるならば、私は意図的に違う宗教的伝統の上に乗ってはどうかと考えている。私が試みたのはまず儒教で、『論語』を徹底的に読んで、それをサイバネティックに読むという研究を行った。それから親鸞という非常に優れた日本の仏教思想家の思想を、同じような観点から読んでいくという研究を行って、今は『老子』という書物を同じような観点から読もうという研究を進めている。

こうしたものの上に意図的に立脚し、その上でそれを乗り越えて別の形で科学的なメソッドを紡ぎ出していくなれば、ヨーロッパのキリスト教を起源として生まれた科学とは別の起源を持った科学が生み出され、それを打ち立てることによって、より客観的な学問に我々は到達できるのではないかと思っている。キリスト教の上に乗って出来上がった学問だけを信頼していると、どこかでやはり歪みが生じる。そこで、儒教や仏教の上に乗ってみようと考えたわけであり、そうするとまた別の歪みが生じるが、その歪みを別の歪みから見る形で二つの歪みが相互に意識されるなら、我々はより客観的にものを考えられる。そのとき、現代が直面している「魔王」に対処することができるのではないかと思う。

ゲーテという思想家、文学者、科学者、偉大なる先人は、そういうことを直感的に理解し



ていたし、それをいろいろな形で表現していたのではないだろうか。

国際高等研究所は、まさに京都と奈良の間であって、仏教の二つの拠点の間にあるので、ある意味では、そういうことを実現する上でも非常に良い場所ではないかと思っている。

※ 文中の時間経過に関する記述は講演時（2014年）のものであり、それに準じた事象、例えば「最近」として紹介した内容はその当時のことである旨、ご了承のうえでお読みいただければ幸いです。

|      |  |
|------|--|
| 発行日  | 2023年12月31日                                  |
| 講演著者 | 安富 歩   |
| 編集発行 | 公益財団法人 国際高等研究所<br><「新たな文明」の萌芽、探求を！>プロジェクト事務局 |
| 編集協力 | アトリエ アロ 大仲佐代子                                |

ISSN 2759-0577



満月に照らされて浮かぶ「ゲーテ」の胸像  
(国際高等研究所庭園)